

があるかと云つて藝者と云ふ程ではなし——など考へてみると、若
方の口を利いた。

「何でぬるいんでせう、ねえさんは黙つて居るけれど
私はぬるくつて、云はないでゐられないわ。」

「さうね本當に、折角あつたまりに來て、これぢや
風をしいちまふわね。」

さう云つた年上の女の齒並びは馬鹿に悪かつた。
「一寸ともう出ませうッてば、何時まで入つてるの
よう。」女の鬼がせびる。

「だつてまだ些少とも洗やしないぢやないの、まだ
くよ。」

「洗つて、白粉つけるの。」

「此人は白粉の事ばかり云つてるのよ、あとで私が
よくしてあげるから心配しないで可つてことさ。」

「だつて、いつまでもく入つてるんだもの。」

「ぬるいからさ。」
ハイカラ鬻の若い方が、ついと半身を浮き出して
乳房のところからお腹まで手拭で覆ふた。その手拭

て來て訊いた。

「いけませんの、生きるものだから死ぬるものだから、
一向ハッキリしませんでね。」

「お切りなすつたさうですね。」

「えい、するとまた其處からウミが出て、本人の體
なんか金火箸のやうになつてますのに、何時までも
何時までも出て來ましてね。」

「もう二年位になりますかねえ。」

「彼はそんなになりますよ。」

ふと氣がつくと、中央の鏡臺の前に並んでゐる連
中は、藝者でないまでも、どうやら素人ではないら
しく思はれる。先刻何の氣もなく置きは置いたもの
の、何だか氣がさして來たから、急いでシャボン箱
をとつて、大鏡の前の、込み合つた中へ割り込んだ
すると年増の姐さんが、そのあとの鏡臺へ場を取つ
て、器用な手つきで、先づびん尻をかきあげた。藝
者かしら？ それとも待合の女將か、斯う不審がる
程、ハイカラや銀杏返しの若いのが、おべつかにお

には「あや壽」の三字が染め込んである。先刻から
言葉の調子から見たところ、どうしても素人ではな
いらしい、待合の女中にしては、些少とさうらしく
ないやうにもあり、何者だらうと？ の不審は何時
までもついて廻る。

其處へ三十七八の肥つた年増が入つて來た。

「オヤ、いらつしやい。」

「姐さんいらつしやい。」

皆なが一様に會釋する。

「ぬるくつていけませんのよ、先刻から出しはがな
くつて困つてますの。」

「さう、それに體がしるこんでるから猶だわね。」

さう云つた姐さんは銀杏返しで、目のパツチリし
た意氣な顔立だが、惜しいことには、年のせいか、
額が四角に抜け上つてゐる。

「妹さんの御病氣は如何ですの。」
今まで居るのか居ないのか、つい氣のつかなかつ
た四十前後の、内儀さん風の女が姐さんの側へ寄つ

湯をくんで持つて行く。それとなしに絶えず注意を
拂つて見てゐると、あの年で顎から肩先きまで眞白
に白粉を塗り立てた。

「矢張り藝者だ、それにしてもよくまあ肥つて……」など思つて
うちに、先方では手早く化粧を了つた。出がけに先刻くんで貰つた
お湯のお椀に、一桶づゝ返して廻つた。

「アラまあ姐さん、どうもありがたい。」

ハイカラも銀杏返しも、同じやうにこんな風な挨拶
をするのであつた。

たつた一人湯槽に浸つて暖つてゐるところへ、例
の女の兒が入つて來たので、捕へてそれとなしに探
つて見る。

「今出て行つた年増の方ね、あの方待合の女將さ
ん？」

「い、え、藝者よ。」

「さう、先刻あなたと話してゐた若い方の方は？」

「自家にゐる藝者なの。」

「何て名前？」

「吉六つて云ふのよ。」

「今一人の方は？」

「知らないの、だけど矢張り藝者よ。」

オヤオヤと些か呆れ氣味にならざるを得なかつた。豫々津の守藝者なるものは、すつと萬事格の下つたものだと聞いてゐるが、これ程安つばげなものだとは思はなかつた。それにつけても日本橋はお江戸の中央だ、素人の女で津の守藝者以上に意氣なのが澤山ある。

素人も仇つばいお妾町

尤も私の知つてゐるのは日本橋でもお妾町と呼ばれた箱崎町の湯屋だから、自然素人とは云ひ條、何處となく仇つばい意氣めかしい風俗の女がいろいろ知れない。

四丁目一番地二番地あたりは家なみのししたやで、大抵は株屋が然らずんば向の某の控家である。四間か五間の小意氣な二階家に浪花川番かの電話がしかれてゐる。夕方になると舞臺會社倉庫

前のお湯屋ののれんをくゞつて、白粉の濃い顔、脚を抜いた大丸髷や、おてこや、ハイカラや、とりぐに美しいのが出入りする。

中でも目に立つて美しいところを四五人、身元を洗つて見ると皆お妾で、新橋、芳町あたりに出てゐたのが多い。魚河岸の何半とが魚問屋の若旦那に落籍されて、此方にちんまりした世帯を持つたのが芳町藝者で、何時も定つたハイカラに結んだのがよく似合つて、二十六と云ふ年には見えぬ若々しさである。少しく赤つ毛の嫌ひはあるが、くつきりと抜ける程色の白い、眼の涼しい二十二三の大丸髷は、打ち見には何處の若奥様かと思はれる初々しさだが、これは以前新橋何家のおしやくだつたのを、六十越した金持ちの隠居に見出されて、お定まりの船板堀に圍はれたのが花のつばみの十六の年で、それから今日まで足掛け八年の間に、何百坪か、一くるのは家作を貰つて、月々入つて来る少からぬ家賃地代で養母と二人樂に暮してゐるのである。してそのついで筋向ひの意氣な格子戸の内に住つてゐるのは砂糖屋

さんのお妾で、これも以前新橋で商賣してゐた女である。色の淺黒い、髪は黒い、きりつとした江戸前の容色で、見るからに仇つばい、しらくない女だが此連中が一緒にお湯屋に落合ひでもした日には堪らない騒々しさである。

「一寸番頭さん、くせ直しのお湯だつてば、何だ此野郎、お何さんに氣があると思つて、其方へばかり親切盡してゐるよ、へん面白くない！」

なんて、忽ちおさとの知れる大口を利く。すると又番頭の方でも黙つてはゐない。「それが如何したい、おたんちん」と云つた風なことを云ふ、果てはお湯のぶつかけ合ひが初まつたりキヤツ、キヤツぶざけて裸體で流しを飛び廻る。



女湯の御化粧

「これさ、何の眞似だねえ、およしつてばさ！」斯う、其騒ぎを取り鎮めの役は定つたやうに花の師匠で、この人は今こそしなび返つた梅干婆だが、これも前身は何處かに左袂を取つたものである。

何うしてあゝも綺麗に白粉がのるか、結び立て以上に、おくれ毛一つない、漆細工のやうな頭髮のかきつけ方の器用さはとても、素人には眞似も出来ぬ藝當である。田舎出の内儀さんや、山の手から越して来た若い女共は、唯々あつげにとられて上手な化粧振りに見とれてしまふ。然し見よう見真似に、何時の間にかお洒落にうきみやつすやうになり、別に新機軸を出して、肥つた新造は、姿をよくする目的で、乳から胸のあたりを、木綿巾のメリンスで、いやと云ふ程、固く引きしぼる。着物を脱いで、お湯に

入つたところを見ると、可哀相に、引きしぼられた痕が、赤く目立つて見える。

それ程までに苦勞する代りには、女の容貌が何處となく垢抜けて、田舎出の者も、少しく土地馴れて來ると、すつくり土臭いところを洗ひ流してしまふ。

だから素人の、正真正正、本當のしもたやの御内儀や娘さんまでが、何處となくお婆染みた様子がある。これも此お湯屋に來る一人だが、さる仲買人のお内儀で、三十前後の頗る仇つばい女がある。流しの端の大鏡の前に坐つて、お湯の度毎、青々した落し眉毛を、華奢な日本剃刀で當る。

「お流し致しませう。」番頭がさう云ふと、
「さうね、可いから、代りに頸をあたつて頂戴よ、又何時ものやうに切つちや嫌だよ。」
「無器用ですから。」

「どうせ、床屋さんぢやないんだから、無器用だつてかまはない、やつて頂戴。」

半玉の騒い溜池の湯

赤阪溜池のラザウム温泉には比較的美しい藝者が澤山ある。

四谷津の守の松の湯のやうに、流しに變な鏡臺風のものなどの備へつけはないが、此處の湯には、着物や物を脱ぐ板場の兩端に大鏡が据ゑられて、一方で正面を寫してゐるうちに、反對の側から後姿が見えて立派な合せ鏡が出来るやうになつてゐる。

お化粧の出来上つた姐さん達の美しい割合に、流しに坐つた素顔は案外つやが無い、して姐さん達は割合おしやべりもしず、さつさと洗つて、磨いて行くけれど、騒々しいのは半玉連中である。

眼の飛び出た程バツチリした丸顔の一勇など、もう彼は十六位にも見える體つきをしてゐながら、嫌味なお轉婆をして見せる。

「一寸と番頭さん、常さんてば！」
湯桶の縁につかまつて、兩脚を長く水泳の眞似に

こんな風にさばけた調子で、下品な悪ぶさげこそしないが、至極軽つばい口のきく方をする。

「あの方はお婆さん？」
番臺に坐つたおかみさんにそつと訊いて見ると、
「ナニ、さうぢやありませんの、私もね、初めのうちはさうがしらと思つてましたが、仲買人の本當のお内儀さんですつて、お實家も矢張り仲買人をなすつてらつしやるんだつて云ひますよ、でもね、旦那と三十も年が違つて、本宅は麻布の方にあるんださうですよ、旦那は本宅と此方と、一晩置きにお泊りださうでして、彼方には先妻の娘さんで三十近いので御養子をしていらつしやるんださうですよ、何ですかねえ、大して好い容色ぢやありませんけれど一寸と小意氣な方ぢやありませんかねえ。」

然り、此處のお湯には意氣なのが、下手な藝者以上美しいのもザラにある。

うかませ、釜場の方を覗きながら、さも／＼用ありげに呼んで置いて、うつかり返事をする。

「ボカン」を喰はせて一人で嬉しがつてゐる。

藝者と云ひ、お婆と云ひ、半玉と云ひ、男性のあこがれのまとなる女共ばかりだが、容姿を飾る着物を脱ぎ、白粉を洗ひ落した生地むきだしのお湯屋をのぞいたら、案外おさのさめたものである。所詮は女ならではの見られぬ圖を御存じないからこそ、勿體ないお寶をつかつて、馬鹿を盡す氣にもなるのである。

青年の戀は餓食である。中年の戀はツマミ食である。老年の戀は開食ひである。 —むか生—